建礼門院

建礼門院

北條秀司戯曲選集

青蛙房

北條秀司戯曲選集

書名　建礼門院
著者　北條秀司
発行者　岡本経一

印刷　新光印刷工業株式会社
製本　株式会社　宮田製本所
製函　㈲佐々木紙器製作所
用紙　十条製紙株式会社
表布　東洋クロス株式会社
装紙　特種製紙株式会社
発行　昭和四十四年十一月廿五日
定価　一、〇〇〇円

発行所　有限会社　青蛙房
東京都文京区本郷二ノ一七ノ九
電話東京(八一三)一五九七
替振　東京　七二三八四

建礼門院

目次

建礼門院　五
修羅　九一
明治の雪　一五九
津軽の旅人　二三五
おばこ　二八九
ウィーンの森　三三五
雪小袖　三五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うすゆき川　四〇七
仇ゆめ　四三九
後記　四五七

建礼門院

七幕

平氏系図（略図）

- 忠盛
  - 清盛
    - 重盛
      - 維盛
      - 資盛
      - 清経
      - 有盛
    - 基盛
      - 行盛
    - 宗盛
    - 知盛
    - 重衡
    - 徳子（建礼門院）
    - 知度
    - 清房
    - 他に七女あり
  - 経盛
  - 教盛
  - 頼盛
  - 忠度

初演の記録

昭和四十四年四月　歌舞伎座

演出　北條秀司
美術　林　悌三
舞踊　藤間勘十郎
　　西川鯉三郎
音楽　杵屋正邦
照明　斎藤政雄
　　相馬清恒

（主なる配役）

徳子（後に建礼門院）　中村歌右衛門
法皇　中村鴈治郎
高倉帝　中村福助
清盛　坂東三津五郎
時子　市川左団次
宗盛　尾上九朗右衛門
知盛　実川延若
重衡　沢村訥升
阿波内侍　片岡我童
右京太夫　中村芝翫

前奏歌

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響あり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理をあらわす
奢れる人も久しからず
ただ春の夜の夢のごとし

第一幕

治承元年（一一七七年）の暮春。
京都東山の山つづき、如意ヶ岳の山腹鹿ヶ谷。
俊寛僧都の山荘の外庭。
若葉の匂いが蒸せ返るごとく漾い、岩蔭には山つつじがいまを盛りと咲きこぼれている。
幕が上がった時、同志中の血気派公卿、宗判官信房、新平判官資行、式部大輔正綱、山城守中原基兼が語気荒く喚いている。

正　綱　そんな莫迦な話があるか。
資　行　それじゃ話がちがう。承服出来ない。
基　兼　もしまことなら、おれは手をひくぞ。
信　房　おれも手をひく。そして、われらだけで事を挙げよう。
皆　　そうだ。そうしょう。

近江中将入道蓮浄が来る。

蓮　浄　どうしたんだよ、大きな声を上げて。
正　綱　貴公は知っているか。成親どのが首班に内定していることを。
蓮　浄　知らぬ。誰がそんなことを言った。
信　房　康頼どのが言われた。
蓮　浄　では、首脳部の間ではもう後々の人事を決めているのだな。
資　行　怪しからん。誰が成親どのなどの扈従になるか。
正　綱　そうだ。本日の談合も欠座しよう。
蓮　浄　まあ待て。事を確かめてからでも遅くはない。俊寛どのへジカに訊いてみよう。
信　房　そうだ。
資　行　それがよい。
皆　　行こう。

五人、殺気を含んで山荘の方に去る。
山鶯の谷渡り。
谷の方の草道を山荘の主法勝寺執行僧都俊寛が、摂津の国の武族多田蔵人行綱と、衆座を避け、個人接渉を行う形で、語らいながら来る。

俊　寛　だからこうして頭を下げているんだ。みんなお主を頼りにしている。一軍を指揮して平家討伐の大仕事をやってくれる武将はお主を措いてほかにはないのだ。

多　田　いやに煽てられるの。

俊　寛　そうではない。衆意を伝えているのだ。西光も康頼も強く望んでいる。

多　田　買いに来られる時はいつもそうなのだが、事が終ると秋の扇だ。武士というものは割りの合わない商売だよ。

俊　寛　冗談だろう。お主がはなれると言ったって放すもんか。新しい政府は軍備充実を第一の条件に挙げている。折角平家に代って政治の実権を握っても、軍備を忽せにすれば、かならず報復を受ける。平家がよい見本だ。だからお主をその長に坐ってもらい、天下の武備を統管してもらうことになっている。

多　田　勝手に決められては困るな。はは。

二人、石に腰を卸す。
時ならぬ管絃の音がきこえる。

多　田　なんだ、あれは。

俊　寛　管絃だよ。よそ目には鹿ケ谷の若葉の宴と見せかけるために、楽人を呼んであるのだ。笛は康頼の奴が吹いている。

多　田　なるほど、水も洩らさぬ作戦だな。

俊　寛　そのくらい真剣にやっているんだ。快くうんと言ってくれ。

多　田（勿体ぶって確答せず）新政府の首班には誰がなるんだ。

俊　寛　新大納言成親卿だ。

多　田　なるほどこれは大物だ。おまけに清盛とは犬猿の間柄。よいところをねらったものだ。

俊　寛　大納言だけじゃない。清盛に怨みを抱くものは天下に充満している。その結集がこたびの壮挙を盛り上げたのだ。

多　田　しかし、大した奴だなあ、清盛という奴は。一介の武士の伜でいながら、アレヨという間に天下を掌握し、太政大臣の高位にのし上がってしまうなどとは。その上娘を時の帝のお后さまに押しつけて、法皇さまと血縁をとり結ぶなどという離れ業を見せおるし。これで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

皇子さまでも生まれてみろ、いよいよ以て平家の天下だ。

俊　寛　だから、その勢力がこれ以上に拡がることをわれらは恐れているのだ。このままほっとけば、いまに天下の政権は清盛の手に掌握されてしまう。それではなんのため法皇さまが、戦までなすって関白家から政権をお取り上げになったかわからないことになる。法皇さまの側近に在る者として、それを黙って傍観していることは出来ないんだ。

多　田　なるほど、そう聞けば、みんな法皇さまのお息のかかった連中ばかりだな。法皇さまはまだごぞんじないのか。

俊　寛　絶対にお耳に入れないことにしている。もしわかって、この愚かものよと御一喝をくらったらそれッ切りだからな。

多　田　そういうことだな。法皇さまは清盛が御贔屓というからな。

俊　寛　少し御贔屓が過ぎて清盛を増長させてしまわれたんだ。われらとしても、これだけ清盛が大きくなろうとは思わなかったよ。

多　田　まったくだな。法皇さまも御内心では後悔あそばしてるのじゃないかな。はは。

平判官康頼が偽装の笛を吹きながら山荘を出て来る。

康　頼　（多田を見て）おう、これは。

多　田　一別以来。

康　頼　はるばる口説かれに見えたか。

俊　寛　それが仲々手強わでな。まだトドメを刺すところまで行かぬのじゃ。一つ援軍を頼む。

康　頼　俊寛僧都の手にあまるとは、さすがは天下にひびく多田源氏じゃ。

多　田　煽て上手がまた一人殖えたわ。

三　人　（わらう）

康　頼　（俊寛に）若い連中が火急の用談があると言って、探しておったぞ。

俊　寛　そうか。では、獲物をひき渡す。首尾よくトドメをな。はは。

俊寛、山荘の方へ去る。

山賊の声。

多　田　しかし、かんがえたのう。こんな山の上で物騒な密議がはじまっているとは、平家の奴らゆめにも知るまいの。

康　頼　うしろには隠れ道が琵琶湖へ下り、前には洛中洛外

が一糸まとわず。六波羅の館で清盛の奴が白拍子に足の爪を剪らせているのまでわかる。ま上から指さして、あれを焼こう、これも焼こうと策を練っとるんじゃから、百に一つのクルイもないわ。はは。

多　田　事を起こすとすると、いつ頃になるのだ。

康　頼　一応祇園会の宵ということになっておる。

多　田　それじゃもうすぐではないか。

康　頼　だからいそいでいるんじゃ、祭りが過ぎると、清盛がまた福原へ行ってしまうでな。

多　田　なるほど。……で、軍費はどれくらい出るのだ。

康　頼　それはお主の言いなりに前渡しする。額を聞かせてくれ。

多　田　そうか。そこまで話がすすんでいたのか。

康　頼　人が来る。向うへ行こう。

康頼、多田を他の場所に誘い、去る。

管絃の音。

山荘の家従年冬が伊勢の住人志麻王を伴って来る。

年　冬　大納言さまが、座敷では衆目があるゆえ、こちらにて待たせよと仰せられました。

志麻王　大儀であった。

新大納言成親が山道に姿を見せる。

成　親　（懐しげに）おう、志麻王。

志麻王　殿。

成親、早足で道を下りて来る。

成　親　志麻王。よく駈けつけてくれた。

志麻王　殿。残念にございます。このたびの除目の事、この胸が張り裂けん思いにございます。

成　親　そちだからなにも隠さぬ。成親は無念じゃ。

志麻王　誰しもこのたびの左大将さまは成親卿じゃと、その御就位を信じておりました。

成　親　わしも信じておった。それを、成り上がり者清盛の伜重盛如きに先を越されたでは、どうもにこの胸がおさまらぬ。

志麻王　しかも、重盛のあとに弟の宗盛を坐らせましたとは……。

成　親　人事にも限度がある。あの病弱の重盛と凡愚なる宗盛を、左右両大将に据えるとはなんたる暴政じゃ。そのような公私をわきまえぬ太政大臣の存在を断じて許すことは出来ぬ。

志麻王　巷に於ても、奢る平家は久しからずという落書が方

方に書かれおります。誰もが清盛の専横を憎んでおります。殿の御一声を承らば、洛中洛外、否、全国の武士が直ちに蹶起して馳せ参じましょう。不肖志麻王も、領地の者々に、一端緩急あらば直ちに京へ駈けつけよと命じてまいりました。なにとぞこの志麻王を今一度御君側に侍らせていただきとうございます。

成　親　よくぞ申した。……憎ッくき清盛。いまぞ思い知れいッ。

志麻王　（下手を見て）あれは若殿さまでは。

成　親　そうじゃ。行ってそちの来たことをよろこばせてやろう。

成親と志麻王、去る。

山荘の方から、左衛門入道西光が俊寛と話しながら下りて来る。

西　光　困ったな。ここまで来て人事につまずいては。

俊　寛　若い連中の不満もわからぬことはない。われらは純忠の大義を奉じて大事に参画している。私の不満や憤激によって事を挙げようとする人の下風に立つことは潔しとしないというのだ。

西　光　うむ。皆純粋だからな。

俊　寛　こんなことも言っておった。大納言どのはかつて徳大寺公らと近衛大将の官位を争われた時、男山八幡宮に僧百人を集めて隆運の護摩を焚かせられた。それのみならず、夜陰に乗じて加茂の森に赴き、対敵調伏の秘法まで修された。そのような陋劣な人物をとても首班に仰ぐわけには行かぬ。

西　光　よく知ってやがるな。それじゃア秘法ではないじゃないか。はは。（豪快な笑声を上げる）

俊　寛　たしかに成親どのの官位執心は人並み外れているからな。

西　光　おいおい、仲間内から火を出しちゃアいかん。

俊　寛　はは。

西　光　（考える）……そいつはしかし困ったな。若い連中を大いに働かそうと思っていた矢先に。

俊　寛　若い連中はお主を首班に仰ぎたいと言っている。若い連中だけじゃない。正直に言って、みんな内心では成親どのを高くは買っていないようだ。

西　光　おれだって買ってはおらん。

俊　寛　じゃ、代って引受けてやれよ。

西　光　いや、おれは身の程をわきまえている。栄位を夢見て世の物わらいになろうとは思わない。それよりもおれは陰の政治をやりたい。卒直に言って、われらは成親どのという人物がどういう中身の人物かということをよく知っている。しかし、諸国から馳せ集った連中

にとっては、大納言さまは山上の花だ。おれが成親どのを首班に推した事由はそれだ。

俊　寛　なるほど、そう聞けば……。

西　光　しかし、いまの段階では若い連中の士気を煽ることがもっとも肝要だ。……よし。この問題はおれが処理する。まかせてくれ。（成親の方へ行こうとする）

俊　寛　若い連中は山荘の方だぞ。

西　光　いや、成親どのに会うて来る。

家従年冬が来る。

年　冬　皆様お揃いにございます。

俊　寛　よし。では始めよう。

西　光　どうだ。この若葉時だ。座敷よりこの青空の下がよいぞ。

俊　寛　そうだな。ここにしよう。皆をここへ。

年　冬　はい。（去る）

西光、去る。

俊寛、高い所に立って、高声に催馬楽をうたう。

それが合図で、幕開きの四人が山荘の方から姿を見せる。

家従達が円座を持って出て、中央の草の上に野宴の席を設ける。

康頼と多田も来る。

康　頼　おう、これは趣向じゃ。

多　田　六波羅を眼下に見下ろしての野宴とはおもしろいのう。

俊　寛　清盛が知ったらおどろくことだろう。

皆　（わらう）

皆、円座に坐る。

家従達が瓶子と土皿を持って来る。

康　頼　なんだ、瓶子など持って来おって。今日は宴ではないぞ。

俊　寛　いや、宴じゃ。管絃の音が耳にはいらぬか。

康　頼　いかさま。

皆　（わらう）

俊　寛　管絃はずっとつづけさせい。

家　従　かしこまりました。

西光、成親、成親の子丹波少将成経、志摩王が来て坐る。

家従達、去る。

管絃、やむ。

康　頼　紹介する。摂津の国よりわせられた同志多田蔵人どのじゃ。

多　田　行綱です。

西　光　やあ、よくわせられた。

成　経　これなるは伊勢の国の同志志麻王です。

志麻王　なにとぞよろしく。

俊　寛　よく見えられた。

皆　（口々に挨拶を交す）

山鶯の声。

西　光　では、議事にとりかかろう。……そうじゃ。その前に大納言どのよりお話があるとか申されていたの。まずそれから。

成　親　わが心境を一言述べる。……こたびの壮挙が予定通り終結したる後、わしが政庁の首座に坐るというような風説があるそうじゃが、わしにはそのような望みは露ほどもない。わしはただおんみらと同一信念の下に、君国のため挺身する心あるのみじゃ。事成った暁は一切の国事をおみ達の手に委ねる所存である。どうかわしを一軍兵として扱ってもらいたい。頼み入る。（謙虚に頭を下げる）

西　光　これは困った。大納言さまに頭を下げられては。

成　親　その大納言がいけないのじゃ。

皆　（わらう）

西　光　ではそういうことで、全員一軍兵の心を以て議事を進めよう。

俊　寛　さあ、偽装の宴を。

蓮　浄　このような偽装ならいつでもいたすぞ。

皆　（わらう）

成　親　（若い連中を和らげようと、努める）さあさあ。みんな、のもう、のもう。

皆、注ぎ合って、土皿を口にする。

管絃、はじまる。

西　光　まず最初に、地方の情勢に就いてであるが、その後地方の同志より続々と声明がまいっておる。清盛のために荘園を奪われたる者、受領の地位を逐われたる者数知れず、一様に心中勃々たるものあり、都よりの指令によって直ちに蹶起することを誓うとの声明が殺到しています。

俊　寛　ここまで戦機を熟させば、も早や一日の遅延も許されまい。泰平に心を許して、清盛の館には極めて少数

の兵を常置するのみとの報告もまいっておる。不意を襲って六波羅の政庁と八条の館に火を放ち、目指す清盛を天誅せば、あとはもう四分五裂、大混乱の内に敗走すること眼に見えるごとしじゃ。

康　頼　いまや天下は大いなる薪の山を積み上げしも同然。火さえ点ずればよいというところまで来ている。事を急ごうではないか。

資　行　都中を火の海にして、平家虫を一匹残らず殲滅しましょう。

皆　（口々に同意の言葉を吐く）

蓮　浄　平家虫はよいが、共に火を浴びる町民達をどうする。

基　兼　そんなことは構っちゃおれません。

資　行　焼跡には新しい家が建つのです。

信　房　一時の不幸は犠牲にさせましょう。

成　親　やあ、勇しし勇しし。その熱烈なる気魄が他日上聞に及べば、さぞかし法皇さまがおよろこび遊ばそう。

蓮　浄　法皇さまにはやはり御内密ということで行くのか。

西　光　わしはあくまでもお耳に入れず、どこまでも臣下だけの責任に於て事を運びたい。事成った暁、一切を御前に報告し、清盛より奪い上げた政権を御前に献上したいと思う。

康　頼　では、地方の兵を呼び集めるのは、何びとの名に於て行なうのだ。われらだけの連名で、兵は起つかな。

多　田　立たんの。それは立たん。法皇さまの令旨を仰がぬ限り、誰も起ち上がらんの。

蓮　浄　都に火を放つ場合も、令旨がなくては、町びとは野盗の来寇と解するかもしれぬ。

俊　寛　そこじゃな。成親どのはどうお考えになられます。

成　親　そうじゃの。むつかしい問題じゃのう。（わざと意見を言わない）

康　頼　わしはどうしても令旨を仰がねばならぬと思う。ただ一つ困ったことは、帝のお后さまになられた徳子さまじゃ。帝のお后さまということは、町の言葉で言えば、法皇さまにとって、嫁、舅のおん間じゃ。つまり徳子さまは清盛の娘御であり、法皇さまのお嫁御であられるわけじゃ。このヌキサシならぬ太いクサビを、いったいどう処理するかという問題じゃ。

基　兼　それは眼をつぶって断ち切るほかはありません。いや、そのクサビを断ち切ることが、こたびの壮挙の最大目的だと思います。

資　行　そうです。わたしもそうだと思います。

信　房　わたしもです。

正　綱　わたしもです。

蓮　浄　それにはどうしても、令旨を仰いで、天下の心を一つに搾らねばならぬと思う。

皆　そうです。そうです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com